

水稲のセジロウンカの発生に注意しましょ う (平成28年8月3日)

水稲のセジロウンカについては、西日本から東日本にかけての多くの地域で、発生が平年より多いと予想されています。府内においても、7月上旬の巡回調査(北部地域、泉州地域)では、一部のほ場において、セジロウンカの発生が多く確認されています。今後1ヶ月の気温はやや高いと予報されており、発生に適した条件となっています。

ほ場を見回るなど発生に注意し、早期防除を心がけましょう。

1 発生状況(巡回調査)

7月の巡回調査では、一部地域でセジロウンカの発生が平年より多く確認された(表1)。

表1. 巡回調査地点におけるセジロウンカの発生状況(水稲25株当たり虫数)

調査地点						
茨木市	能勢町	和泉市	岬町	富田林市	羽曳野市	八尾市
(下音羽)	(倉垣)	(国分町)	(谷川)	(西板持)	(尺度)	(水越)
3.3	47.7	43.7	37.7	13.3	7.7	2.3
(5.2)	(3.5)	(19.7)	(12.2)	(11.1)	(15.9)	(0.6)

注)()内は、H18~H27年度調査平均。ただし羽曳野はH14~H20,H27年度の平均。

2 発生及び生態

(1) 幼虫はほとんど白地のものから黒化の強いものまであり、変異が大きい

い(写真1)。

(2)成虫は4～4.5 mm。灰褐色あるいは黒褐色で、胸部背面に白斑が目立つ(写真2)。

(3)7月末～8月に多発するため夏ウンカと呼ばれる。

(4)被害田は円形の坪枯れにならず、多発すると一面が黄変枯死する。



写真1 セジロウンカ(幼虫) 写真2 セジロウンカ(成虫)

(原図 環農水研)

(原図 環農水研)

3 防除対策

(1)ほ場の状況をよく観察し、早期発見に努める。

(2)薬剤散布は株元まで十分に薬剤が行き渡るように行う。

(3)薬剤抵抗性の出現を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(4)セジロウンカは、フィプロニル剤(プリンス)に対する感受性が低下しているとの報告があるので、同剤を箱施用しているほ場において、今後発生が多い場合は、下記薬剤(参照表2)を使用する。

表2. セジロウンカ防除薬剤の例(薬剤使用にあたっては収穫前日数に注意する)

薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	系統
トレボン粒剤	2～3kg/10a	21日/3回	ピレスロイド系
トレボン乳剤	1,000～2,000倍	14日/3回	ピレスロイド系
スタークル顆粒水溶剤	3,000倍	7日/3回 ※1	ネオニコチノイド系
アルバリン顆粒水溶剤			
アプロード水和剤 ※2	1,000～2,000倍	7日/4回	IGR系

※1. スタークル顆粒水溶剤とアルバリン顆粒水溶剤は、同一成分(ジノテフラン)を含むため、使用回数に注意する。

(ジノテフランを含む農薬の総使用回数は4回以内(育苗箱への処理 及び

側条施用は合計1回以内、本田での散布、空中散布、無人ヘリ散布は合計3回以内))

※2.「ウンカ類幼虫」に登録。

◎防除薬剤については、以下にて確認してください。

- Web 版大阪府病害虫防除指針(<http://www.jpnpn.ne.jp/osaka/>)
- 農林水産消費安全技術センター 農薬登録情報検索システム
(<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm001.html>)